

## 2022年 年報巻頭言

白梅学園大学・白梅学園短期大学 子ども学研究所 所長 松田 佳尚

2022年もコロナ禍で幕を開けました。COVID-19のパンデミックは、健康危機だけでなく、人道的危機とも考えられており、人間開発指数（HDI）においては過去数十年にわたる進歩が転じたようです（国連貿易開発会議、2021年）。また、経済発展と出生率に対する影響は、今後数十年にわたり影響を及ぼすとみられています。国際連合児童基金（ユニセフ）はCOVID-19を子どもの危機とみなし（UNICEF, 2021）、また、経済協力開発機構（OECD）はCOVID-19からの回復に向けた努力の中心に子どもを据えるべきだと主張しています（OECD, 2021）。COVID-19が世界中の子どもたちに与える影響を見極め、人類にかつてないほどの影響を及ぼすパンデミックからの回復を早めるためにも、政策対応のための基礎データとしても子どもの発達研究者の役目は重要だと思われます。本学の教員／研究者が、パンデミックの子どもの発達への影響に基づく科学的知見に貢献することを期待しています。例えば、パンデミックによる教育機会への影響、学習損失、雇用への関与、社会的弱者（障害者や高齢者等）への影響が増大するかどうかなど、多くの重要な領域が検討されているところです。また、パンデミック中に観察されたどの影響が時間とともに持続・増加し、どの影響が薄れ、また、誰にとってそうだったかを記録することも重要でしょう。

一方で、COVID-19による子どもへの悪影響を緩和する、保護要因についても少しずつ研究が進められています。パンデミックによって家族の経済的・精神的困難が増大したのと同様に、保護要因のエビデンスも研究論文として現れ始めていることは注目に値します。例えば、予測不可能な事態がもたらす負の影響は、家族が日常生活を維持できた程度によって相殺されるようです。また、ある研究では、青年期において、社会的なつながりがパンデミック時に保護機能を発揮したようであることが報告されています（Magson ら、2021）。保護要因に関する研究が科学雑誌で発表されるにつれ重要になってくることとしては、逆境に直面しても幸福（well-being）を促進することによってパンデミック前とパンデミック中で同じプロセスが適用されるのかどうか、あるいはパンデミック時に特有の新しい保護要因が特定されるのかどうか、こういったことを見極めることが重要です。また、そのプロセスが家庭の経済状況によってどう異なるかを理解することも重要です。

現在、これらの分野やその他の分野で発表されている研究の量は十分ではありませんが、今後数年のうちに科学的な記録が増え続けることが期待されています。COVID-19の収束は予断を許しませんし、人類の健康に対する世界的な挑戦の新時代が始まっています。そのような中、子どもの発達研究者が集めた情報は、科学への重要な貢献となることでしょう。